

「ケアとは何か」の学際的研究 ——「グレート・アイディア」としての「ケア」概念研究序説

江藤裕之

【要 旨】 長野県看護大学特別研究（平成17年～19年度）「careとspiritualityの東西比較を目指した、日本の伝統的careとspiritualityの学際的研究」では、第一段階として「ケア概念の研究」と「日本の伝統的なケアの観念について」をテーマに、看護、哲学、歴史、文学、言語、心理、社会などの学際的視点から研究が進められている。「ケア」を考察の中心にすえ、「幸福」「愛」「善」などの哲学的テーマと関連させたより広い視点からのアプローチを目指している。そこで、「ケアとは何か」について、①「今までケアについてどのような研究がなされてきたか」というケア概念研究の研究（メタ研究）、②「人々がケアについてどのように考えてきたのか」を研究の中心とし、そこで把握したケア概念を「幸福」「愛」「善」といったグレート・アイディアズとの関連から考えることで、看護分野に限らない、広い見地からのケア概念研究に資することを目標としている。

【キーワード】 ケア、ケア概念、概念研究、比較研究、グレート・アイディアズ

はじめに

平成17年度から平成19年度の3ヵ年を研究期間として認可された長野県看護大学特別研究「careとspiritualityの東西比較を目指した、日本の伝統的careとspiritualityの学際的研究」では、本学の異なる領域の看護系教員、及び非看護系教員により研究が進められている。また、本研究は看護学のみならず、哲学、倫理学、言語学、心理学、比較文化論などを専門とする海外の研究者（Geoffrey Hunt教授 [英国Surrey大学]、Kurt R. Jankowsky教授 [米国Georgetown大学]、Joseph Subiondo教授 [米国California Institute of Integral Studies]、etc.）の協力を得て、国際的研究プロジェクトとしても進行している。

本研究申請時の計画では、平成17年度は上記研究内容に関する文献資料の収集と分析、研究の枠組みと方向性の具体化、海外研究者との国際比較研究に関する調整が主たる活動内容である。続く平成18年度から平

成19年度にかけては、研究成果の発表（口頭、文書）、シンポジウムなどを計画しているが、最終的には本研究の報告書に加えて、ケア概念の本質、及びケアを「幸福」「倫理」「愛」「善」などといったグレート・アイディアズ（松田他、1999；Adler, 2000）との関係から論ずる啓蒙書を日本語で、また、ケア概念の東西比較（比較文化論的視点から）に関する学術書を海外の共同研究者と英語で出版し、看護分野に限らず広い見地からのケア概念研究に資することを目標としている。

本稿では、本研究の中間報告として、進捗状況を含んだ研究プログラム全体の目的、計画、方向性、特に、国際比較共同研究の日本側チームの現段階における研究枠組みを報告し、われわれが見落としている重要な点の指摘や、今後の活動への有益な示唆となる建設的な批判・叱正を仰ぎたいと思う。

なぜ「ケア」の研究なのか

本研究は、将来的に長期プロジェクトとして位置づけたい「careとspiritualityの東西比較」研究の基礎として、まずは「ケア概念の研究」と「日本の伝統的なケアの観念について」をテーマに、看護のみならず、哲学、歴史、文学、言語、心理、社会などの学際的な視点から、日本人、そして日本文化の特質を踏まえつつ研究を行ない、ケア概念について考察することを目的としている。

では、なぜケアの研究なのか。看護の中心的概念とされている「ケア」は、それ以外の対人的行為においてもまた重要な位置を占めている。家庭で、地域で、保育や教育の場で、実務の場で、つまり、広い意味でのコミュニティーを形成する場——ここでのコミュニティーは機能集団と対蹠的な意味で、ドイツ語の「ゲマインデ (Gemeinde)」の概念により近い——で、より幸福な人間関係を追求するためにケアは不可欠の要素だと言える。この視点に立てば、「ケア」という概念を、「幸福」や「愛」、そして「善」といった人間にとっての究極のニーズである倫理的なテーマに関連させた広い視点から考察するアプローチが意味を持つてくる。さらに、「ただ生きる」だけでなく「よく生きる」ことへとつながる人間関係や社会に関するテーマについての示唆も、ケアの研究は与えてくれる予感があるのだが、それは、ひとつのグレート・アイディアとしてのケア概念を研究することで、人文学的アプローチを含め、より広い範囲にわたる学際的研究が可能となると考えるからである。

最近では、看護師が行う「ケア」を特に「ケアリング」という言葉で区別するといった記述も見られる（メディカル出版事業部編、2002）。しかし、広い意味で看護の目的でもある人間が「よく生きる」ことを目指すために、ケアが不可欠であることを考えれば、看護実践との関連からのみならず、より広い視点からケアを考える必要がある。そこで、子育てや教育の場でのケアの問題、職場などにおける人間関係という視点からのケア、さらには人間の生に関わるさまざまな哲学的な視点からも、ケアの本質に迫ってみようというのが本研究の発端である。そこで、研究者の一人はCare

is everybody's business. (ケアはみんなの問題) という標語を作成している（江藤、2004；2005）。

看護実践では体や心のケアという具体的な行為が中心となるので、看護現場における個々の事例観察などからケアの本質に迫ることもできよう。あるいは、看護職者を対象に「ケアとは何か」についてのアンケート調査やインタビューを行うことでケアのひとつの側面が明らかにされることであろう。その意味で、看護師の資格を持ち、実践経験もある研究者を中心とした本研究の土台には看護における「ケア」という概念が根づいており、そこを出発点にしていることは確かである。

しかし、われわれが目指しているものは、ケアの概念、すなわちケアの全体を考察することであって、部分を明らかにすることではない。もちろん、部分から全体を直観（「直感」ではない）する能力を持つ人がいることを否定はしない。しかし、本研究では、部分の寄せ集めによって全体を知ろうとするのではなく、最初から全体を見通せるような研究を模索し、それを提示することをもくろんでいる。そこから、さまざまな「場」（看護も含め）におけるケアの本質を考えていきたいと思う。

何をどのように目指すのか

本研究の最終目的は「ケアとは何か」という問題についてわれわれ研究グループの答えを出そうというものである。言うまでもないことだが、「～とは何か」という問いたては、対象の本質を問う哲学的な問題設定である。

そこで、「ケアとは何か」について、①「今までケアについてどのような研究がなされてきたか」というケア概念研究の研究（メタ研究）と、②「人々がケアについてどのように考えてきたのか」というケア概念を哲学、言語学、社会学、心理学などを踏まえながら見ていくことを研究の中心としている。さらには、そこで把握したケア概念を「幸福」や「愛」、そして「善」といった哲学的テーマとの関連から考えてみる。そこで、各研究者の担当は以下ようになる。

1. 「ケア」とは何か？

- (1) 「ケア」という言葉を考える
- (2) 「ケア」と「キュア」の違い
- (3) 「ケア」と「ケアリング」について
- (4) 「ケア」の概念はどのように研究されてきたか

2. ケアの倫理と幸福論

- (1) 倫理学の伝統における「ケアの倫理」
- (2) 2つの「知」とケア：受け身の知である intellect としてのケア
- (3) ケアと自己理解
- (4) ケアすることと、ケアされること

3. ケアの地域性と相対性

——日本文化の中のケア概念：〈甘え〉概念を手がかりに

- (1) 「ケア」はなぜ日本語に訳せないのか
- (2) 「ケア」と「甘え」
- (3) 母性社会と父性社会の違い：対人関係、コミュニケーション、ケアの視点から
- (4) 日本における母性社会の思想的背景：観音思想の視点から

4. グレート・アイディアとしてのケア概念

- (1) “Mind with body” の人間研究の方法論
- (2) リベラル・アーツとしてのケア概念の考察
- (3) 天使的学問としてのケア学

この枠組みが、必ずしもそのまま「ケアとは何か」についての啓蒙書の目次立てになるということではなく、あくまでも現時点での各研究者の独自性を活かした方向性を示したものである。

本研究で目指したいことは、繰り返しになるが、個々の具体的な看護行為におけるケア実践の紹介を中心にするのではなく、可能な限り広い範囲にわたる学際的視点からケアの本質を問い、その理解の過程を提示することである。それによって、現象レベルの事例として看護実践を通して得られる看護師個々人の「ケア体験」から、その意味や本質を考察するプロセスを見出し、個々の体験を超えたひとつの「ケア経験」へ

と高めていけるのではないかと考える。つまり、具体と抽象との間を行き来するようなヒントが、「～とは何か」を問う過程には秘められているのではないだろうか。そして、ケアが看護の占有物や特定の場面のみ存在するものではなく、さまざまな場で「よりよく生きること」を志向するすべての人間にとって必要不可欠なものであるということを、看護職者のみならず一般の読者にも理解してほしいと思うのである。

文 献

Adler MJ (2000): *The Great Ideas. From the Great Books of Western Civilization*. Open Court, Chicago.

江藤裕之 (2004)：看護を哲学しよう Care is everybody's business. *Quality Nursing*, 10 (12), 114-118.

江藤裕之 (2005)：看護・ことば・コンセプト. 文光堂, 東京.

松田義幸, 須賀由紀子, 江藤裕之 (1999)：グレート・ブックスとの対話. 「学習社会」の理想に向けて. 財団法人かながわ学術研究交流財団, 神奈川.

メディカル出版事業部編 (2002)：看護学学習辞典 (第2版). 学習研究社, 東京.

【Summary】

Interdisciplinary Approach to the Concept of “Care” as a Great Idea

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

Having received a special grant for “an comparative study of ‘care’ and ‘spirituality’ east and west” from of Nagano College of Nursing (NCN), a study group of NCN is now working on “concept of care” and “traditional value of care in Japan” from an interdisciplinary viewpoint — nursing, philosophy, history, philology, psychology, sociology, etc.

By means of focusing on “care” instead of “nursing” a wider approach to the notion of care in relation to such philosophical themes as happiness, love, goodness may be possible. Therefore, at the first stage of our study we focus on 1) meta-study of the concept of “care” and 2) philological approach of the study of “care”, and, as a consequence, aim to contribute to the study of “care” as a whole from a more comprehensive and holistic perspective.

Key words: care, concept of care, concept analysis, comparative study, great ideas

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
Tel & Fax 0265-81-5138
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp